

言語の階層化に関する試論

松尾雅嗣

広島大学平和科学研究センター

An Essay on the Hierarchy of Languages

Masatsugu MATSUO

Institute for Peace Science, Hiroshima University

SUMMARY

As a preliminary step to the description and explanation of the relationship between languages and social groups in the context of the inequality and conflict among language groups, the present paper attempts at a survey of the phenomenon of the stratification of languages or the hierarchy of languages in a state or society. This paper tries to present and examine as many cases as possible. And it shows that if we include sub-varieties of an individual language such as dialect, the phenomenon of language stratification or language hierarchy can be found not only in multilingual states or societies, but also in allegedly “monolingual” states or societies. Though the present paper focuses exclusively on the hierarchy with three or more languages, these cases are

not so rare exceptions as is expected at first. Instead, they are actually rather wide spread throughout the world. This suggests that this phenomenon is worth further exploring.

目次

- 1 はじめに
- 2 多言語国家と多言語社会における言語の階層化
- 3 単一言語国家と単一言語社会における階層化
- 4 階層と序列の多重化

結び

1 はじめに

言語集団間の不平等と紛争の関係を明らかにするためには、政治的、経済的、社会的、文化的な不平等の実態と集団間の言語に関わる紛争の態様と実態を明らかにする必要がある。本稿は、このような大きな枠組におけるひとつの小さな試みであり、3つ以上の言語が存在し、それが階層化あるいは序列化される事例を検討し、言語の階層化あるいは序列化に関して、共通の特徴を抽出し、可能ならば一般化可能な命題を抽出することを目的とする。別言すれば、この試論は、言語集団間の不平等の実態と態様のひとつの側面を明らかにすることを目的とするものである。

階層化あるいは序列化の問題を考えるためには、幾つかの前提と仮定が必要である。まずこの点を整理しておく。

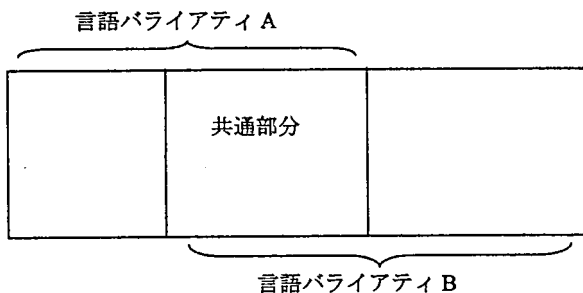
まず、第一に、ここで言語と言う場合、すべて言語バリエアティの意味であるとする。即ち、日本語、ロシア語、英語といった通常別個の言語とされるものに加えて、同一言語内の方言などの下位区分もすべて含むものとする (Hudson 1980: 24)。言語バリエアティは、語彙、文法、音声など言語的諸要素の集合である。そしてこの集合には、通常言語学の仮定とは異なり、表記システムをも含むものとする (Kawano & Matsuo 2000: 3-4, 松尾 2000)。従って、ここで言語的差異と呼ぶのは、このような言語バリエアティの差異である。しかも、このような言語バリエアティの差異は、現実の言語的諸要素の差異の大小そのものではなく、もっぱら認識のレベルの問題だということである。図に示すよ

うに、ふたつの言語バリエアティがあるとき、両者が異なると認識されるか、同一であると認識されるかは、一般に図1に図式的に示す共通部分の大小（同じことであるが異なる部分の大小）とは無関係である。⁽¹⁾

「言語」をこのように言語バリエアティと解するとき、階層化と序列化が問題となるのも、実は通常の意味における言語ではなく、言語バリエアティに関してである。

図1 言語的差異

出所：松尾（1990），85



第二に、後の段階では、言語集団を問題にすることにならざるを得ないとしても、本稿でまず問題にするのはここで定義した意味での言語の階層化であって、言語集団の階層化ではない。「言語的差異が社会集団の不平等を反映し、維持し、強化する」（松尾 1990: 56）ことを論証するという観点からすれば、社会集団、就中「有意な言語的差異があるという認識によって区別される集団」である言語集団、の階層化と序列化をこそ、まず対象とすべきであろう。ここで、言語集団ではなく、敢えて言語の階層化から始めるのは、ふたつの理由による。ひとつは、後に検討する事例から容易に理解されるように言語の階層化は多くの場合言語集団の階層化とほぼ一対一に対応するからである。また、ひ

とつには、それにもかかわらず、言語の階層化と、言語集団の階層化、序列化は分析的には別個のものとして考えたほうがよいからである。蓋し、言語と言語集団は、一般に一对一に対応しないからである。極端な例をひとつだけ挙げておけば、マイヤース・スコットンが示したように、一連の会話の間に、ふたつの言語バリエアティを使い分ける能力の有無が、ふたつの言語集団、実際にはエリートと大衆を分ける基準となることもあるからである (Myers-Scotton 1990: 32)。このような事例を考慮するならば、言語集団の規定には、集団の言語使用の実態、例えば二言語使用、なども含めなければならない。ここで、言語の階層化をまず対象とするのは、言語集団と見なすべき集団が、階層化あるいは序列化されたどのような言語と、場合によっては複数の言語と、対応するかを明らかにする前提としてである。

本論に入る前に次に断っておくべき点は、本論で対象とするのは3つ以上の言語に関わる場合だけであるということである。通常の研究手順からすれば、最も単純な二言語の関係、具体的にはふたつの言語の序列化から始めて、二項関係を多項関係に拡張するのが普通の方法であろう。実際、大多数の国家や社会における言語の序列化は、二言語の関係であるかの如く見える。しかし、ひとたび詳細な検討を始めれば、その実態が、方言間の関係や下位集団の関係を孕む多言語の関係であることも少なくない。それゆえ、二項関係の詳細な検討と明示的なモデル化は別項に譲り、本稿では三言語以上の関係の実態をまず検討する。

本稿で論ずる言語の階層化は、原理的には地理的に定義できる空間において成立するものとする。インターネット空間、国際機関、企業、組織などにおける階層化は本稿では差当り対象としない。地理的空間としては、国家や、国内の行政単位など明示的に制度化された空間と、西アフリカ、中央アジアあるいはトランシルヴァニアのような歴史的文化的空間が考えられる。前者の場合、EUの如き事例も当然考慮する必要があるだろうし、後者の場合特定の地域や地方だけでなく、特に世界的な英語の優勢や英語帝国主義といった観点からすれば

世界全体についても考察する必要もあろう。しかしながら、本稿では、原則として連邦国家を含む国家、国家内部の行政単位、国内地域における言語の階層化を対象とする。

言語と言語集団の階層化については、これまで様々な研究者により多くの事例が報告されているが、これをもとに事例を検討する。但し、大多数の場合、言語の階層化と言語集団の階層化が区別されないで論じられているが、ここでは上述の理由から、言語集団の階層化としてではなく、すべて言語の階層化として理解する。また、各事例の詳細な検討は割愛し、もっぱら言語の階層化に共通の特質を探ることとする。

上のような前提の下で、以下、事態の最も明白な多言語国家と多言語社会から始め、次いで単一言語国家と単一言語社会における階層化を検討し、最後に階層や序列の並列化という現象を検討することにする。

2 多言語国家と多言語社会における言語の階層化

言語の序列化、階層化は典型的には多言語社会に見られる。ここでは、まず一国内における階層化の事例を検討する。一国の階層化の場合、往々にして階層化が、実態として成立しているのみならず、公的に、具体的には憲法を頂点とする法的規定によって、制度化されることを特徴とする。

多くの多言語国家は、連邦制を採るが、言語の序列化も、連邦一州（あるいは共和国）という行政区分に対応するのが普通である。言語は、連邦の支配的言語を頂点として、州の支配的言語から、家庭内、少数集団内で辛うじて生命を保っている最底辺の少数先住民、移民の言語に至る序列のいずれかに位置づけられる。

表1の、カレール＝ダンコースの分類は、旧ソ連の諸民族の書き言葉に関して、公用語としての地位に着目したものである。旧ソ連においては、この言語の序列は、一般に民族の序列に対応するものと見なされていた。実際、この序

列は、連邦内部におけるそれぞれの民族の（名目的ではあれ）自治の程度、具体的には自身の共和国、自治共和国をもつかもたないか、に正確に対応する。

表1 旧ソ連における言語の序列化

出所：カレール＝ダンコース（1981）、293-294

1. ソ連内諸民族の民衆言語としてのロシア語。
2. 連邦構成共和国の民族的文章語。ウクライナ語、ベロロシア語、ウズベク語、カザフ語、キルギス語、トゥルクメン語、タジク語、アルメニア語、アゼルバイジャン語、グルジア語、モルダヴィア語、ラトヴィア語、リトアニア語、エストニア語。
3. 自治共和国および自治州の文章語。タタール語、バシキール語、ウドムルト語、アヴァール語、アドウイグ語、オセツト語、ハカス語、チェチェン語など（全部で約40言語）
4. 北方および他地方のいくつかの民族が住む民族的な地区で、きわめて限られた社会的機能を果している書き言葉。コリヤーク語、ネネツ語、ナナイ語、クルド語など（全部で10をわずかにこえる言語）。

この場合の序列化の基準は、別の観点からすれば公用語としての通用範囲と
言ってもよいであろう。

次の表2に示すのは、これもまた多言語国家であるナイジェリアにおける言語の階層化である。この階層化もまた、連邦の公用語である英語を頂点とする、言語の公的地位、特に公用語としての地位を基準にした階層化である。多くの途上国では、何らかの公的地位をもたない言語、例えば、ピジンあるいはクレオールが母語を異にする多数の一般民衆の共用語あるいはリンガ・フランカであることも少なくない。パプアニューギニアにおけるトク・ピシンのように公用語の地位を獲得した例もないではないが、公的地位を基準とすると、現実に

多くの人々の使用する言語、特にリング・フランカを適切に扱えない場合が生ずる。この表で、中立的共用語という形でピジン（正確には、Nigerian Pidgin English）が最下位に置かれるのもその例である。ピジン、クレオールの問題と、公的地位によらない階層化の問題は後に論ずる。

表2 ナイジェリアにおける言語の階層化

出所: Akinnaso (1996), 47

序列	言語
公用語	English
国語 ^{a)}	Hausa, Igbo, Yoruba
地域(州)言語 ^{b)}	Hausa, Igbo, Yoruba, Fulfulde, Efik, Kanuri, Tiv, Ijo, Edo, Nupe, Igala, Idoma, etc
地方言語	350以上の言語
中立的共通語	Pidgin English

原注

アラビア語とフランス語は特化した機能を有するので表から除外。

- a) これら3言語は、憲法では英語と同じ範疇に置かれているが、憲法における規定の文言はこれら3言語の将来における公用語の地位を示唆するように思われる。
- b) 1991年8月、州の数が21から30に増加した。これは新たな地域言語の増加と他の言語の地域言語としての認知の運動を生み出した。

また、リング・フランカとの関連で言えば、ナイジェリアと異なり、土着の共通言語であるスワヒリ語を公用語としたタンザニアや、マレー語を名前を変えて公用語としたインドネシアのような事例もある。しかし、この場合にも、そしてまた旧宗主国言語のような外生的な言語ではなく土着の言語を公用語とした多くの脱植民地国家においても、ナイジェリアのように国家公用語という形で制度化されないにせよ、英語のような外生言語が事実上序列の頂点にあることが少なくない。英語の使用あるいは英語とスワヒリ語の頻繁なコード切り替えの能力が、エリートと大衆を分ける基準となることもある (Myers-Scotton 1990)。この意味で言えば、ナイジェリアの状況とタンザニアの状況の違いは、エリートの二言語使用が公的に制度化されているかに尽きる。

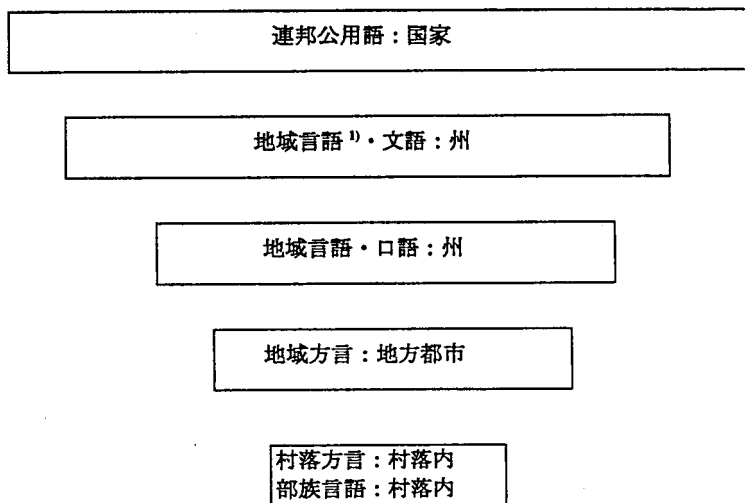
多言語国家や多言語社会を州や自区域といった行政単位や歴史的な地域区分に分けた場合にも、このような国家内部の下位地域が単一言語的であることは、ほぼ完全なオランダ語地域とほぼ完全なフランス語地域が連邦を構成するベルギーなど少数の例外を除けば、まずないと言ってよい。⁽²⁾ 例えば、言語人口の統計は省略するが、旧ソ連における連邦を構成する15の共和国だけでなく、その下位単位である自治共和国についても、そのほとんどが多言語、多民族的である。言語州という理念に従って州を再編したインドについても、後に見るジャム・カシミール州は極端な事例であるとしても、実際にはほとんどの州が多言語州である (Mahapatra 1990: 6)。従って、このような地域あるいは地方においても言語の階層化は存在する。

図2は、主としてヒンディー語地域である北インドにおける言語と言語バリエーションが、その通用範囲を基準として住民の意識の上で階層化されている状況を模式的に示したものである。この階層におけるどの言語を使用できるかが、人々の社会的地位を決め、また社会的地位が言語使用能力を決める。図の下から2番目の集団の中で、即ち自分達の州をもたない集団の中で、書き言葉や文章語の伝統をもつ集団が自治要求、州の獲得獲得を掲げることは容易に理解できる。自身の州を獲得することは、この図から明らかなように、(集団固有の)言語の地位の上昇にほかならない。のみならず、自己の言語による、教員も含めた州公務員としての雇用、高等教育の機会が開けるのである。

この場合、制度化の度合いは、旧ソ連やナイジェリアの場合とほぼ同様である。唯一の差異は、階層化が国家全体についてのみならず、国内の特定の地域に関しても成立していることである。

この北インドの事例に典型的に見られるように、階層化は、多くの場合下位言語の使用者が上位言語をも使用するという下位集団の二言語使用を意味する。従って、上位の言語ほど使用者が多い。言語使用者の数から見る限り、階層関係は、言わば逆ピラミッドの形を取るようになる。

図2 北インドにおける言語バリエーションの地域的階層化
出所：Gumperz(1971), 4-6 より作成



1) 通常は、州の公用語である。

北インドと同様の現象は、同じインド国内のひとつの州内にもみられる。表3に示すのは、カシミールの事例である。モハンによれば、カシミールにおいては、権力、人口、伝統などの暗黙の基準に従って、多様な言語（集団）が階層化あるいは序列化されている。即ち、エリート言語であるウルドゥー語、英語を頂点として、土着少数言語に至る言語と言語集団の序列が存在する（Mohan 1988）。これを表3に示す。

表3 カシミール（ジャム・カシミール州）における
言語の階層化

出所： Mohan (1988), 76

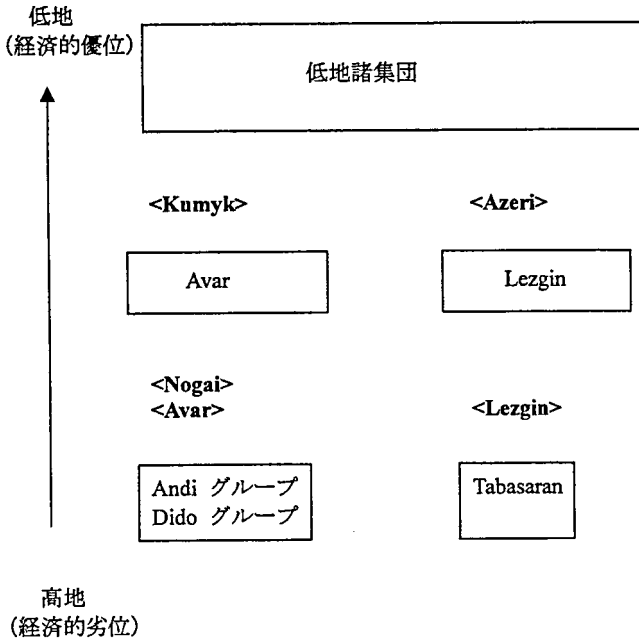
支配的言語	： エリート言語 大衆言語	ウルドゥー語、英語 カシミール語
非支配的言語	： 有力言語 中位言語 外部少数言語 土着少数言語	長い伝統をもつ他の州の公用語 アッサム語、ベンガル語、 グジャラト語等 伝統はないが一定の地位をもつ 言語 ドグリ語 ¹⁾ 伝統のない非土着の 地域共通語言語 ラダク語 ²⁾ 、パハール語 ³⁾ 集団内でのみ用いられる 土着少数言語 Siraji 語 ⁴⁾

- 1) パンジャブ語の方言とされる
- 2) マンチャト語の方言とされる
- 3) 通常は、ネパール語を中心とする近縁言語群を指す。
- 4) 詳細不明

同様の現象はインドに限らない。図3に示すように、多言語地帯であるダゲスタン（自治共和国）においても同様の階層化が見られる（Bennigsen and Lemerrier-Quelejay 1985）。ここでも、下位言語集団が上位集団の言語を使用するという形で階層化が成立する。但し、この場合序列化は、低地から高地へ至る形を取る。

図3 ダゲスタンにおける垂直的言語選択

出所：Bennigsen and Lemerrier-Quellejey (1985), 126
 <>内は使用される言語を示す



これまで論じた事例は、いずれも何からの形で連邦国家の形態を取る国家の事例であった。公用語、教育言語などの形で、言語の序列が制度化されやすい事例であると言えよう。しかしながら、多言語国家であってもこのような制度化が階層関係の最上部のみ、具体的には国家公用語のレベルのみで行われている事例もある。これまで論じた事例との相違は、もっぱら制度化のレベルの相違にある。

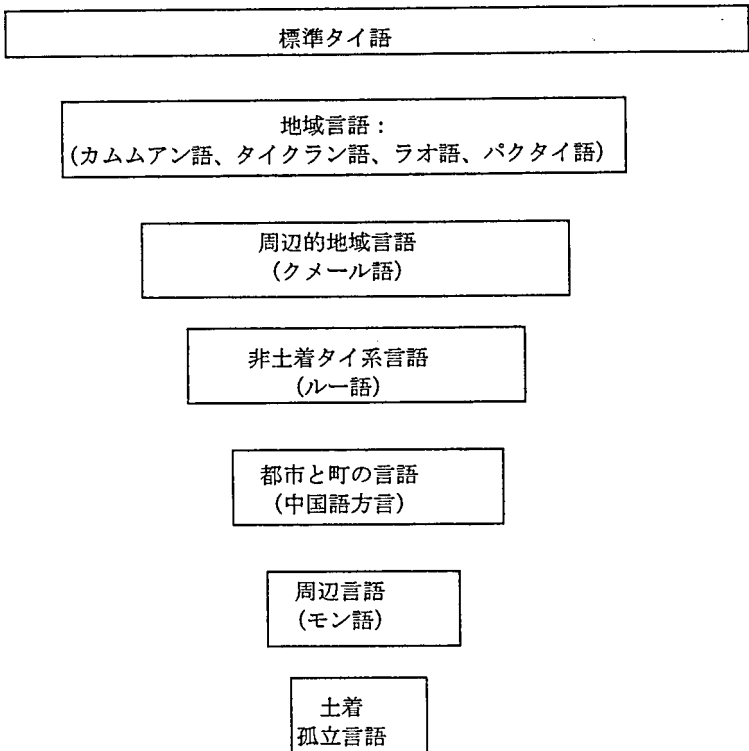
この典型的な事例は、タイであろう。スモーリーは、タイに関しては、国語として制度化された標準タイ語を頂点とする図4に示すような階層化が成立し

ていると主張する (Smalley 1988)。

スモーリーによれば、図における上位の言語を母語とする集団と下位の言語を母語とする集団の間には、われわれが下位言語使用者の二言語使用と呼んだ関係がほぼどの階層においても妥当する (Smalley 1988: 247)。ここでは、言語使用者数に関してほぼ完全な逆ピラミッドが成立しているのである。

図4 タイにおける言語の階層化

出所: Smalley (1988), 247 より作成



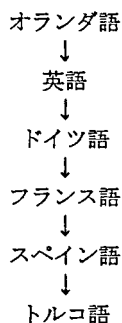
言語的多様性とその階層化、序列化は、しばしば国民統合の障害と見なされ

る。タイの事例は、この点できわめて興味ある事例である。スモリーが、タイについて言語的多様性と国民的統一を成し遂げた事例であると述べている (Smalley 1988: 246) ように、タイは階層化された言語的多様性と国民統合がともに成立する事例と見なしうるからである。実際、一般的に言って、言語的多様性と国民統合は、必ずしも矛盾するものではない。おそらくスイスについても同様の命題が成立するであろう。本稿の目的に添ってさらに論点を絞っても、一方における言語的多様性と序列化と、他方における国民の言語的統合は必ずしも矛盾するものではないと言えるであろう。勿論、ここで言う言語的統合は、国家あるいは地域における生活のあらゆる側面でのほぼ普遍的な単一言語使用を意味しない。このような事態が、言語的多様性と両立しないことは明白である。ここで言う言語的統合は、国内、地域内で大多数の成員の共通語として用いられる言語バリエアティが存在することを意味する。いずれにせよ、この問題は稿を改めて論ずべき問題である。

以上の事例は、制度化が序列化の重要な要素であるとともに、多くの場合、制度化されない階層と序列が存在することも同時に示している。次の図5は、制度化されていない言語の階層化を示す一例として、オランダにおける調査結果を示したものである。

図5 オランダ語母語話者による言語の重要性の評価

出所：de Bot and Weltens (1997), 148



ここでは、恐らくは言語の使用価値や言語に対する愛着や忠誠心といった基準によって意識の上での明らかな階層化が成立している。この序列化は、オランダ人（この場合、正確にはオランダ語の母語話者）の意識における言語の重要性の序列化を示すものであるが、単一言語社会と一般に見なされている場合でも序列化が存在することを示している。

3 単一言語国家と単一言語社会における階層化

多言語国家と多言語社会において言語間に前述のような階層化が成立することは、容易に想像される場所であるが、現実には、単一言語国家や単一言語社会においても、例外というよりはむしろ常態として、言語の階層化と序列化は存在する。勿論、厳密に言えば、単一言語国家や単一言語社会における言語の階層化という表現は形容矛盾である。単一言語国家と単一言語社会は、ここでは、「と見なされている」を補って理解しなければならない。

後にかかげる事例からも明らかなように、ひとつの言語にも地理的、社会的方言など多くの下位バリエアティが存在する。従って、異なる言語間の序列化に関して見出される現象は、言語バリエアティについても、バリエアティの境界が相当に曖昧になるとしても、ほぼ妥当する。

しかも、事態を錯綜させるのは、言語にしる、民族、エスニック集団にしる、それまで下位のカテゴリと見なされていた存在が、独立の存在であることを主張し始めることも多いことである。インドにおける言語的な州の再編が、それまでヒンディー語の方言集団と見なされていた集団の言語的独自性の主張を煽ったことは周知の事実である。ここでは触れないが、同様の事例は、民族の覚醒、エスニック集団の再生と呼ばれる現象に多く共通して見ることができる。

このような単一言語社会における言語バリエアティの階層化のひとつの典型が前近代的な身分制社会であることは論を俟たない。例えば、表4に掲げるジャワ語がその古典的例である。ギーアツによれば、身分と親疎を表現せずにジャワ語を使用することはほぼ不可能である（Geertz 1972: 167）。

ジャワ語は、言語バリエアティと身分の階層化が厳格に対応する事例であると言えよう。しかし、このような言わば前近代的な社会だけでなく、単一言語社会とされている多くの近代産業社会においても、しかも前近代の残滓としてではなく、このような階層化は成立する。国家の標準語と方言の関係はどこにでも見られる現象であるが、より複雑な階層化が存在することも少なくない。

表4 ジャワ語における諸言語様式と身分関係
出所：Geertz(1972), 169-179 より作成

身分	言語様式	相手	下位言語様式
エリート	A	上 対等 下	krama, madya, ngoko
都市上層	B	上 対等 下	krama, madya, ngoko
都市下層 農民	C	上 対等 下	krama, madya, ngoko

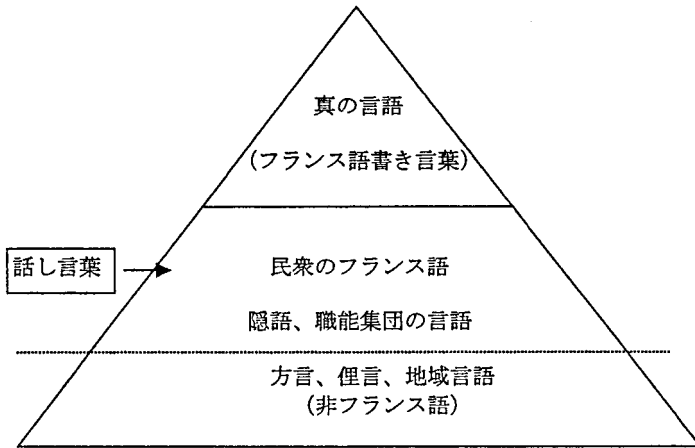
図6はそのひとつの例であるフランスの事例であり、支配的集団の目に映った言語バリエアティの階層化を示すものである。フランスが単一言語国家であるか否かについては、今日誰も否と言わざるをえないであろうが、他方で、しばしば指摘されるように「一にして不可分のフランス」という理念が、多くのフランス国民の間に生きていることも事実である。

図6に示された判断に対して、ある意味では愚かで無知な書き言葉信仰、標準語信仰でしかないと批判することは容易であるが、このような認識と価値判断が言語集団を規定し、それが社会的機能をもつことが重要なのである。なお、この認識構造において最下位に位置づけられているフランスにおける多くの地

域言語の問題は既に論じた多言語国家における階層化の事例でもある。

図6 フランス人にとっての言語バリエティの階層化

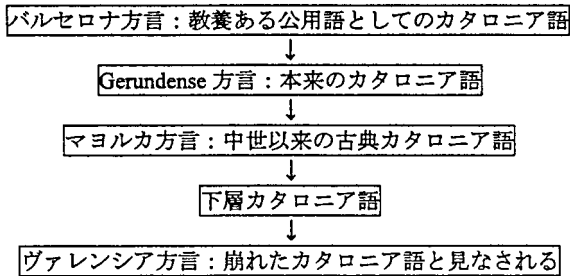
出所： Lodge (1993), 7



単一言語国家における言語バリエティの階層化は、ひとつの国家全体についてのみならず、国家内部の一地域についても、成立する。これは多言語国家全体ではなくその一部の地域についても言語の階層化が存在したのと同じことである。次の図7は、スペインのカタロニアの事例であるが、カタロニア語は、カタロニアだけでなく、フランスの一部、ピレネー山脈の小国アンドラ（カタロニア語は公用語である）、マヨルカ島を含むバレアレス諸島、ヴァレンシア、そのほか地中海の一部でも使用されている（Perez-Alonso 1993: 88）。図7においても、支配的集団であるバルセロナのカタロニア人の認識においては、方言間の明らかな階層化が存在する。おそらくこの認識は、反発も含めてではあるにしても、カタロニア語を話す多くの人々によって共有されていると見てよいであろう。この序列の最下位に位置づけられるヴァレンシア方言については、ヴァレンシアでは、カタロニア語とは異なる独自の言語であるという主張が近年力を得ていることも注目に値する（Neugaard 1995）。これが、ヴァレン

シア人の、図に示されるような従属的地位からの脱出の試みであることは否定できないであろう。

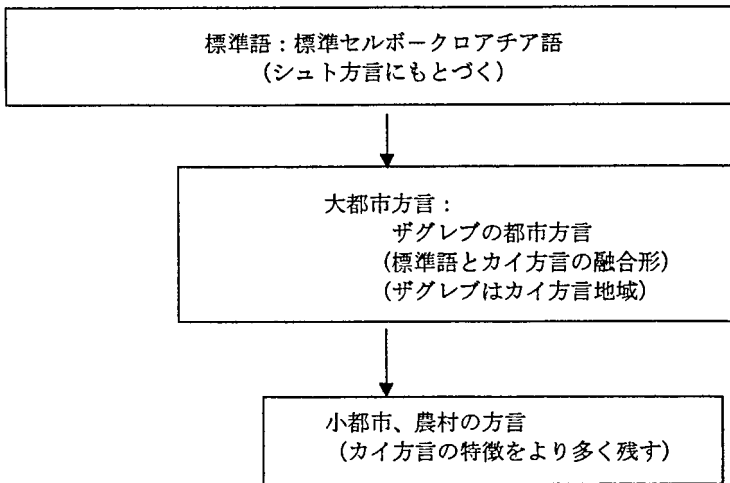
図7 カタロニア語諸バリエティの階層化
出所：Perez-Alonso (1979), 121



近年、「都市方言 (urban vernacular)」（Dittmar et al 1988: 5, Magner 1992: 193-194）、「新方言」、「ネオダイアレクト」（真田ほか 1992: 101-107）などと呼ばれる、標準語あるいは共通語と近いが、伝統的な方言概念とは区別される言語バリエティの存在が知られてきている。例えば、図8に示す標準セルボクロアチア語はシュト方言を基礎とする（Kalogjera 1985: 94）旧ユーゴスラビアの標準語であるが、もともとシュト方言とは異なるカイ方言地域であるクロアチアの首都ザグレブでは、一方で方言と標準語に共通の要素を備え、明白な地域的な要素を排除した、かつ普及する標準語と地域方言との融合形態である安定した日常語が生まれている（Kalogjera 1985: 94）。この言語バリエティは、図に示すように地域的共通語として機能する。地域共通語であることと、標準語と方言の融合的形態であることに着目すれば、地域的コイナーと呼ぶこともできよう。しかもこの都市方言は、明らかに使用者自身によっても標準語とは異なるものと認識されている（Magner 1992: 194-195）。他方、小都市や、農村部のカイ方言は、ここで言う都市方言であるザグレブのカイ方言に比べ、歴史的

なカイ方言の特徴とされるものを多く含んでいる。後者は、支配的なシュト方言との融合の度合いが高いからである (Kalogjera 1985: 95)。

図8 標準語と方言の階層化：セルボークロアチア語の事例
出所：Kalogjera (1985), 94-99 より作成



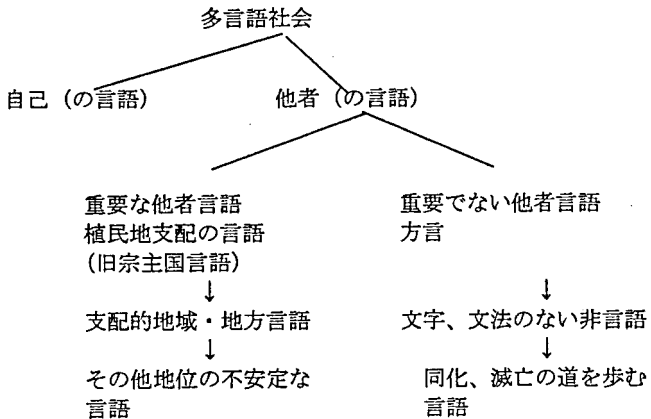
標準語と、都市方言と、他の方言の間には、その通用範囲と威信に関して階層化が生ずる。小都市の住民は、大中都市では大中都市の土着方言に合せなければならないが、逆は期待できない。ザグレブのカイ方言話者が周辺のカイ方言地域を訪れる時、かれらは都市方言に頼ることができる (Kalogjera 1985: 99)。

この事例に見られる現象は、言語と言語パラライアティの差異はあるとしても、われわれが北インドやタイのような他の多言語地域、多言語国家において既に見た現象と本質的には同一である。

4 階層と序列の多重化

これまで論じた言語（集団）の階層化と序列化の事例は、国家や社会の中の支配的集団の視点か、社会の外部の視点から見た階層化であった。次の図9に掲げるのは、社会における非支配的集団から見た言語（集団）の階層化を記述する試みである。これは、インドにおける非支配的集団の見た言語の階層化である。ここでは、前に掲げた北インドにおける階層化と異なり、階層関係が並列的に二重化されていることに注目する。二重化されたふたつの階層関係が同列でないことは、それが重要性によって区分されていることから明らかであるが、このような非対称な階層関係の並列は、言語間、言語集団間の関係をさらに複雑なものにする。

図9 非支配的集団から見た多言語社会における言語の階層化
出所：Pattanayak (1996), 105



言うまでもなく、議論やモデルは複雑であることのみをよしとしない。理論やモデルはむしろその簡潔明解であることによって評価されるべきである。しかし、上掲図9に示すような階層化の並列が、単純な階層化と異なる特質を有

するか、あるいは言語の階層化の一般的理解に資する特質を有するかについては、少なくとも検討に値しよう。以下に言語の階層と序列が並列化される事例を幾つか検討するのはこの意味からである。

言語の階層化の検討に際して、並列化の問題と並んで考慮すべきは、階層化の地理的広がり、厳密に言えば階層の社会政治的な範囲の問題である。これまで検討した事例は、もっぱら一国の内部における言語の階層化を論ずるものであったが、言うまでもなく、ひとつの社会や国家を超えた階層化も存在する。例えば、今日の北米大陸のフランス語は標準フランス語とは異なる発展の結果であるが、往々にして本国の標準フランス語より地位の低い方言と見なされる。例えば、呼ばれるケベック方言 (Harris 1990: 203, Weinstein 1989: 54)、ルイジアナ州における、標準フランス語使用者には理解不可能な、地域的な話し言葉であり、一般的な表現手段である、「無学な労働者のフランス語 (red neck French)」とされるケイジャン、あるいはフランス語を基礎とするクレオール (Harris 1990: 202, Weinstein 1989: 59) 等がそれである。また、ベルギーのフランス語地域ワロニアにおいても同様の現象が見られると言う (Weinstein 1989: 58)。

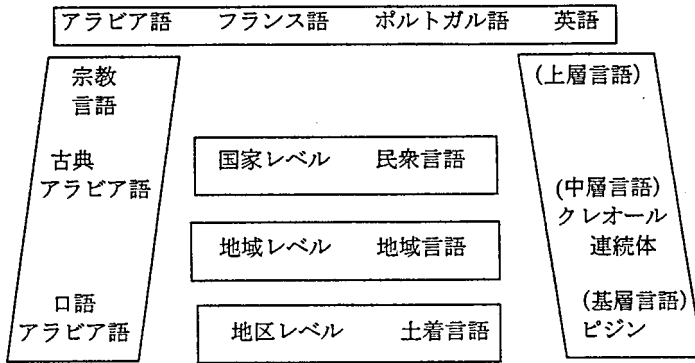
図10に示すのは、西アフリカにおける錯綜した国内的国際的な言語の階層化と並列化を包括的に把握しようとする意欲的な、おそらくは先駆的な試みである。

図によれば、西アフリカにおいては、英語、フランス語、ポルトガル語など国際的言語である旧宗主国言語とアラビア語を頂点とする三つの並列的な階層関係が成立している。ひとつは、イスラム教にもとづく宗教的序列化であり、コーランの古典アラビア語が最も高い地位にある。他のふたつは、世俗的序列であるが、言語の土着性によって区別される。国内土着言語の序列は他の多くの例と同形の階層化を示している。ここで注目すべきは、言語の階層化がひとつの国家を超えて成立していることである。と同時に、一元的な階層関係ではなく、複数の異なる基準によって、複数の階層関係が並列的に存在することで

ある。

図 10 西アフリカにおける言語の多元的階層化

出所： Brann (1988), 1414



複数の階層関係という観点から注目すべきは、ピジンとクレオールの階層化を示す第三の階層関係である。これは、ピジンとクレオールが純然たる土着言語でないことによって第二の序列と区別される。図10の第三の階層関係はピジンとクレオールの間の階層化と同時に、クレオール内部におけるポストクレオール連続体 (post-creole continuum) と呼ばれる境界の判然としない階層関係を示したものである。ポストクレオール連続体は、ピジンが母語として土着化し、クレオールが成立した後に、元の言語である上層言語、例えば英語やフランス語など、と再び接触する (例えば、旧宗主国言語が国家の公用語となる) ことによって生ずる脱クレオール化の過程で起こる現象である。元の言語との接触により、クレオールは、上層言語と呼ばれる元の言語に限りなく近いバライアティと、土着の要素の影響を多分に受けた元の言語とは最も近い基層言語と呼ばれるバライアティを両極端とする連続体に転化する。中間のバライアティは中層言語と呼ばれる。これがポストクレオール連続体である (Romaine 1988:158-159)。

さらに複雑な状況においては、ふたつのクレオール連続体が並列する場合もある。図11に示す、旧オランダ領ギアナ、今日のスリナムがその例である。スリナムの公用語はオランダ語であるが、その実体はスリナム・オランダ語と呼ばれるクレオールである (Healy 1993:280)。他方スリナムでは、英語を基礎とするスラナンと呼ばれるクレオールも話される。スラナンの言語人口は、13万人から17万人だが、国民の8割が理解する共用語でもある。スリナムにおいては、このふたつのポストクレオール連続体が並列的に存在し、言語的には相互に影響し合っている (Healy 1993:280)。

図11 スリナムにおけるポストクレオール連続体の並列
出所：Healy (1993), 280

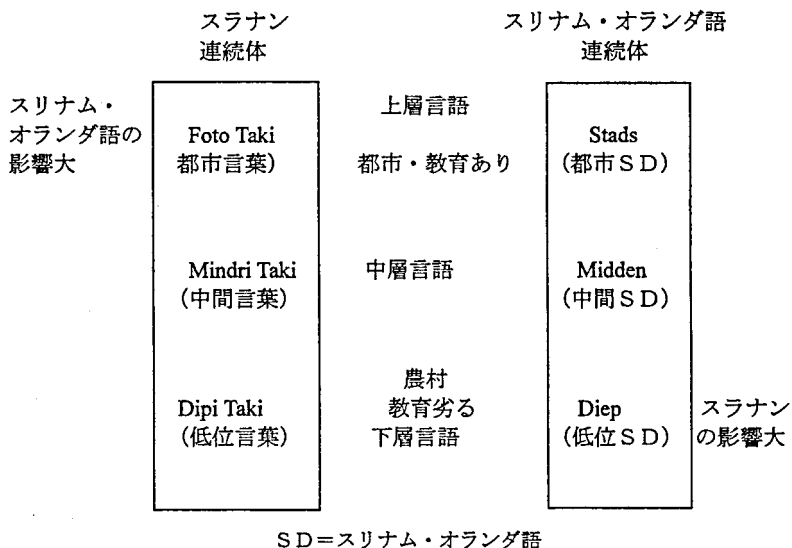


図11は、この関係を図式的に示したものである。このふたつの階層的連続体が、スリナム社会の諸集団の地位とどのような相互関係にあるかは詳らかにしないが、いずれの連続体においても、上層言語が都市と教育に結び付けられ、

下層言語が農村と無教育に結び付けられていることは明らかである。

このような言語の階層化を観察するとき、これまで暗黙に前提してきたように、階層と階層の境界、言語と言語の境界を明確に定めることが果たして可能であろうかという疑問が生ずる。所謂ポスト・クレオール連続体に代表される事例の場合、境界を明確に定めることは一般に困難であろう。このことからして、明確に区別される階層という概念を捨てて、むしろ連続的変化 (cline) あるいは連続体 (continuum) といった概念を援用するほうが妥当ではないかとも考えられる。しかしながら、階層化と序列化の事例を検討する限り、少なくとも認識の上では、大多数の当事者により異なる階層が認識され、識別されていることもまた否定できない。勿論現実には、おそらくは特定の言語的特徴 (の集合) や他の社会的特徴 (の束) をもって二層ないしは三層に識別されているのが実態であろう。この意味では、言語と言語集団の階層化が成立するためには、当該社会において当事者は、隣接の階層を識別できれば十分であって、すべての階層を区別できる必要は必ずしもないとも考えられる。おそらくは、話者の最もよく知る言語を基準として、その上下の階層を区別できればよいであろう。

従って、階層化される言語 (バリエアティ) に関しては、原則的に階層への分類が可能であるという命題が成立するものと仮定しておく。

結び

三つ以上の言語が階層化、序列化されることは、本稿のごく大雑把な概観によっても、決して稀有な例外的現象ではなく、むしろ普遍的に存在しうる現象であることが明らかであろう。階層化、序列化は、公的に制度化されることもあれば、⁽³⁾ 必ずしもそうでないことも多い。

また、階層化の要因としては、当該言語の使用者の集団として政治的、経済的、社会的地位、人口規模などが推測できる。これは、冒頭で触れた階層化された言語と言語集団の関係にかかわる問題でもある。社会と国家における集団の地位や絶対的あるいは相対的な人口規模といった要因と、この集団と結び付

けられる言語の関係が次の検討課題である。とりわけ、両者の関係を、「言語的差異が社会集団間の不平等を反映し、維持し、強化する」という観点から説明することが次の課題である。

階層化の要因の問題とともに、次の検討課題とすべきは、理論的にはより基本的な二言語間の階層あるいは序列関係の検討である。本稿で三言語以上の場合のみを概観したのは、例えば、フランスにおけるフランス語とオクシタン語やブルトン語などの地域言語の関係の如く、一見二言語間の関係と見える現象が、より詳細に見れば本文に示したように多言語間の関係である場合が少なくないからであった。しかしながら、理論的には二言語関係が基本的であり、少なくとも理念型としては、次の段階としてこれを明らかにしておく必要がある。そして、三言語以上の階層化が二言語の階層化によって記述・説明可能であるかどうかを吟味する必要がある。

註

- (1) 詳細については、松尾 (1990) 参照。
- (2) ベルギーと言えども、フランス語地域には、正確に言えばドイツ語少数集団地域が含まれる。Aunger (1993), 38, Ishiyama and Breuing (1998), 124 等参照。
- (3) 制度化を本格的に論ずるとすれば、公用語、教授言語など公的に制度化された場合と、ダイグロッシア (Ferguson 1959) のように、社会的に制度化された場合を分けて論ずる必要も生じよう。しかし、ここではこの点は論じない。

引用文献

- Akinaso, F. Niyi (1996), "Vernacular Literacy in Modern Nigeria," *International Journal of the Sociology of Language*, 119, 43-68
- Aunger, Edmund A. (1993), "Regional, National, and Official Languages in Belgium," *International Journal of the Sociology of Language*, 104, 31-48
- Bennigsen, Alexander and Chantal Lemerrier-Quelquejey (1985), "Politics and Linguistics in Daghestan," Isabelle T. Kreindler (ed.) (1985), *Sociolinguistic Perspectives on Soviet National Languages: Their Past, Present and Future*, Berlin: Mouton de Gruyter, 125-142
- Brann, Conrad M. B. (1988), "West Africa," Ulrich Ammon et al (eds.) (1988), *Sociolinguistics: An International Handbook of the Science of Language and Society*, Volume 2, Berlin: Walter de Gruyter, 1414-1429
- カレール=ダンコース、エレーヌ (高橋武智訳) (1981)、『崩壊した帝国：ソ連における諸民族の反乱』、東京：新評論
- de Bot, Kees and Bert Weltens (1997), "Multilingualism in the Netherlands?" Theo Bongaerts and Kees de Bot (eds.) (1997), *Perspective on Foreign Language Policy: Studies in Honor of Theo van Els*, Amsterdam: Benjamins, 143-156
- Dittmar, Norbert, Peter Schlobinski and Inge Wachs (1988), "Variation in a Divided Speech

- Community: The Urban Vernacular of Berlin," Norbert Dittmar and Peter Schlobinski (eds.) (1988), *The Sociolinguistics of Urban Vernaculars: Case Studies and Their Evaluation*, Berlin: Walter de Gruyter, 3-18
- Ferguson, Charles A. (1959), "Diglossia," *Word*, 15, 325-340
- Geertz, Clifford (1972, 1960) "The Linguistic Etiquette," John B. Pride and J. Holmes (eds.) (1972), *Sociolinguistics: Selected Readings*, Harmondsworth: Penguin, 167-177. Excerpt from Clifford Geertz (1960) *The Religion of Java*, Free Press
- Gumperz, John J. (1971), "Some Remarks on Regional and Social Language Differences in India," John J. Gumperz (Selected and Introduced by Anwar S. Dil) (1971), *Language in Social Groups. Essays by John J. Gumperz*, Stanford, California: Stanford University Press, 1-11
- Harris, Martin (1990), "French," Bernard Comrie (ed.) (1990a), *The Major Languages of Western Europe*, London: Routledge, 200-225
- Healy, Maureen (1993), "The Parallel Continuum for Suriname: A Preliminary Study," Francis Byrne and John Holm (eds.) (1993), *Atlantic Meets Pacific: A Global View of Pidginization and Creolization*, Amsterdam: John Benjamins, 279-289
- Hudson, Richard A. (1980), *Sociolinguistics*, Cambridge: Cambridge University Press
- Ishiyama, John T. and Marijke Breunig (1998), *Ethnopolitics in the New Europe*, Boulder: Lynne Rienner
- Kalogjera, Damir (1985), "Attitudes toward Serbo-Croatian Language Varieties," *International Journal of the Sociology of Language*, 52, 93-109
- Kawano, Noriyuki and Masatsugu Matsuo (2000), *Language of Politics or Politics of Language? Toward an Integrated Perspective* (IDEC Research Paper 2000-1), Higashiroshima: Graduate School of International Development & Cooperation, Hiroshima Univ.
- Lodge, R. Anthony (1993), *French: from Dialect to Standard*, London: Routledge
- Magner, Thomas F. (1992), "Urban Vernaculars and the Standard Language in Yugoslavia," Ranko Bugarski and Celia Hawkesworth (eds.) (1992), *Language Planning in Yugoslavia*, Columbus, OH: Slavica, 189-199
- Mahapatra, Bijay P. (1990), "A Demographic Appraisal of Multilingualism in India," Debi Prasanna Pattanayak (ed.) (1990), *Multilingualism in India*, Clevedon: Multilingual Matters, 1-14
- 松尾雅嗣 (1990) 「言語の差異：現実、認識、不平等」、『広島平和科学』, 13, 73-99
- 松尾雅嗣 (2000) 「表記体系をめぐる紛争：文字紛争論序説」、『広島平和科学』, 22, 75-114
- Mohan, Rakesh (1988), "Language Planning and Language Conflict: The Case of Kashmiri," *International Journal of the Sociology of Language*, 75, 73-85
- Myers-Scotton, Carol (1990), "Elite Closure as Boundary Maintenance: The Case of Africa," Brian Weinstein (ed.) (1990), *Language Policy and Political Development*, Norwood, NJ: Ablex, 25-42
- Neugaard, Edward J. (1995), "The Continuing Valencian Language Controversy," *Language Problems and Language Planning*, 19(1), 60-66
- Pattanayak, D. P. (1996), "'OTHER" Languages in Multilingual Societies," Shivendra Verma and Dilip Singh (eds.) (1996), *Perspectives on Language in Society: Papers in Memory of Prof. Srivastava*, Delhi: Kaliinga, vol. 2, 100-107
- Perez-Alonso, Jesus (1979), "Catalan - An Example of the Current Language Struggle in Spain: Sociopolitical and Pedagogical Implications," *International Journal of the Sociology of Language*, 21, 109-125
- Romaine, Suzanne (1988), *Pidgin and Creole Languages*, Essex: Longman
- 真田信治 (他) (1992) 『社会言語学』, 東京: 桜楓社
- Smalley, William A. (1988), "Thailand's Hierarchy of Multilingualism," *Language Sciences*, 10(2), 245-261

Weinstein, Brian (1989), "Francophonie: Purism at the International Level," Björn H. Jernudd and Michael J. Shapiro (eds.) (1989), *The Politics of Language Purism*, Berlin: Mouton de Gruyter, 53-79